# 身体を包む「衣」

紙 布 作 家
妹尾　直子

沖縄で織物を学んでいた時の事です。芭蕉の葉に料理を包むように載せて皿として使用したことがありました。芭蕉の葉は大きく、防水性もあるので、汁物の食べ物も問題なく、食べ終わったら洗わずそのまま畑に戻す事ができました。新年には、月桃の葉に包んだ餅「ムーチー」を食べて、厄除や健康を祈願する伝統食もありました。月桃の葉には消臭・殺菌・防虫効果があり、包んだ餅からは月桃の香りもして、季節を感じることができました。私達の身近にも柏餅、柿葉寿司なども同じく、葉で包むことの効能を生かした季節の食べ物がみられます。

植物の効能を良く知る先人たちは、食べ物や衣服として生かしてきたのだと知る時、今の暮らしはその感覚が鈍る生活環境になってしまったのかと感じてしまいます。植物から受ける感覚や知恵を生かしたいと思うようになりました。

私は「紙布」（しふ）という、和紙を糸にして衣を作る仕事をしています。江戸時代に外国から安価な木綿が入ってくる前、木綿は高価なものでした。当時、農家の農閑期の仕事として作られていた和紙が身近にあったため、それを細く切り、糸にして木綿の代わりに使用していました（**図１**）。紙布は野良着や、火消し、漁師の仕事着としても使われていました。水に濡れても撥水性が良く、重くならない。そして汗を良く吸い、丈夫だったのです。紙布が幕府への献上品にされる程、高級品になったのも江戸時代でした。

仙台藩白石の片倉氏は紙布の製産を推奨し、武家の仕事としてその技術を磨いていきました。紙糸を作ることに適した和紙が漉かれ、原料となるカジノキの栽培、細い紙糸の作り方、織りの技術もより高度なものになりました。しかしながら明治を迎えると、外国からの木綿に圧され紙布は衰退していきます。

昭和に入り、片倉家の当主片倉信光氏を中心に廃れていた白石紙布の復興を志しました。その後、白石の細い糸の作り方を現代でもできるように工夫、尽力されたのが、水戸の櫻井喜一氏・貞子さんご夫妻でした。私は櫻井さんの紙布を初めて見た時の感動は今も忘れられません。細い紙糸で作った紙布は、身に纏うと軽く、和紙の通気性のよさが肌にまとわりつかず爽やかで、快適でした。そして和紙の生成りの色が品よく奥深い光沢がありました。美しい紙布に魅了された私は、櫻井貞子さんに師事し、紙布作りを一から学ぶ事が出来ました。この紙布を少しでも多くの人に纏ってもらいたいと思ったのです。

紙布は軽く洗濯もできます。紙から出来ていると言っても溶けることはありません。木綿や絹の衣類と同じ様に使っても大丈夫なのです。和紙という植物繊維が絡み合いできたシート状のものが素材になっているからです。日常的につかわれている「紙」、つまりコピー用紙やティッシュペーパーなどとは同じシート状のものでも繊維の絡み方

**図１**　和紙から紙糸、そして紙布を作る様子

が違います。使われている植物も違います。コピー用紙などの「紙」ではこのような紙糸を作ることはできません。繊細な和紙があってこそ紙布を作ることができるのです。

現在、「和紙を纏う」、「和紙で身体を包む」をテーマに、帯、着物のほか、シャツ、小物を織っています（**図２**）。身体や物を包んで何よりも和紙の良さを体感してもらいたいと思っています。紙布は素材である和紙、手漉き和紙がどのような紙であるか、で決まります。紙が漉かれる場所、水、原料の素材、原料の処理の仕方、漉き方などが大切です。昨年より、和紙の原料になる植物を畑で育てるところから始めました（**図３**）。私は、育てた植物で紙を漉き、糸にして紙布にするという全行程が自分の手でできればと思っています。それで身体を包むことができれば幸せです。

**図２**　紙布で作られた製品
上：シャツ、左下：諸紙布帯、右下：小物包み

和紙の三大原料としては主に、楮・三椏・ガンピが挙げられます。その中でも繊維の長い楮で漉いた和紙を、主に紙布に使用しています。

この楮はもともとカジノキとヒメコウゾを掛け合わせ、改良されたものです。楮の親であるカジノキは、縄文時代に日本へ入ってきたといわれます。南方では「タパ」という樹皮を叩いてシート状にしたものになり、日本では樹皮の繊維を裂いて糸にして「太布（たふ）」という布を作りました。楮以前は紙の原料でもありました。

**図３**　左からカジノキ、カジノキの白皮・甘皮、楮の畑

カジノキは漢方にも使用され、主に皮膚病などに効くようです。カジノキを紙布にして纏うということは、その植物の効能で身体を守るということにも繋がっているのだと考えています。身に纏うものは第二の皮膚という考えもあります。何を纏うのか、ということは身体を守り、生きて行くなかで非常に重要なことなのです。

「衣・食・住」といわれる中で「衣」は一番始めにくる程大切なものです。人が身に纏うもの、身体と包むものの作り手として、その素材と人の繋がりを伝えるパイプ役になれればと思うのです。